二〇二四年度　高校推薦入試　作文問題

次の文章は、「『もやもや』の正体は…変革への一歩　若者がジェンダー学ぶ『ジェンカレ』」というタイトルの新聞記事です。これを読んで後の問いに答えなさい。（※「ジェンカレ」― ジェンダー・カレッジの略）

閣僚に5人、副大臣・政務官はゼロ。今月の内閣改造での女性登用の実態だ。「ジェンダー平等後進国」を抜け出せない日本で、ジェンダーをめぐる課題を10～20代が体系的に学ぶ場所「ジェンカレ」が動き出した。高校生や社会人になりたての若い世代が、それぞれの「もやもや」をきっかけに集まり、知識や仲間を得て小さな変革を各地で起こし始めている。

首都圏の病院で助産師として働くのんさん（29）は、お産の現場でもやもやしていた。生まれた赤ちゃんに、男の子ならブルー、女の子ならピンクのネームタグをつける。「男の子だからまゆ毛がりりしいね」、「女の子なんだから足は閉じなきゃ」。タグを見て医療スタッフがそんな声かけをすることがある。出産したばかりの母親に「パパは家事を手伝ってくれますか」とたずねる会話も日常茶飯事だ。

もやもやの正体を知りたくて、「ジェンカレ」が1期生を募集していると知って飛び込んだ。

昨年5月に始まった第1期には31人が参加。世界の潮流や日本の政策などを座学で学んだうえで、自分だからできる「マイ・アクションプラン」を半年かけてつくる。のんさんは「ネームタグを変える」と掲げた。

勤め先で6月、職員から意見を募る機会があった。「ジェンカレ」で出会った先輩や仲間に相談して背中を押してもらい、ネームタグの見直しを提案したところ、実現することに。近く、男女とも黄色のタグに変わる。「ネームタグだけが問題ではないけど、変化を一つ、起こすことができた。ジェンダーバイアスのない医療現場をめざしたい」と話す。

大学で工学部だったりゅうさん（25）は、40人のクラスに女子学生が3人しかいない状況を疑問に思い、自分で調べたり大学でジェンダーの授業を受けたりするように。「女の子は数学が苦手」「女の子なのに物理なんてすごいね」といったバイアスが積み重なり、理系から女子を遠ざけている現実を知った。

院生だった昨年、「ジェンカレ」をSNSで見つけて参加。この春、都内のコンサル会社に就職し、希望したところ、大手企業のダイバーシティー推進の仕事を担当することが決まった。「ジェンカレ」で出会った仲間らと「男性アクティビストを増やす会」を立ち上げ、座談会などの活動も続ける。「男性がジェンダーの問題により自覚的になって行動を起こしていけば、もっと変化が進みやすいと思う」

■救世主いない、コツコツと　「ジェンカレ」を運営・桜井彩乃さん

「ジェンカレ」を運営するのは桜井彩乃さん（28）だ。3年前、ジェンダー平等に向けた国の基本計画をつくる会議に若い世代の提言を届けた際、もやもやを抱えた10～20代に多く出会った。自身は大学時代、女性団体の勉強会などに通って知識を吸収したが、政治やビジネス、健康や医療、家族や社会保障など多岐にわたるジェンダー課題について若い世代が包括的に学べる場所をつくりたいと考えた。

10月に始まる第2期には、定員の30人を大きく上回る80人超の応募が全国からあった。痴漢被害にあったことをきっかけにジェンダー問題について考え始めた高校生や、女性が活躍しているという触れ込みだったが、意思決定層は男性ばかりで閉塞（へいそく）感を感じている大企業の若手社員など、応募者の問題意識は多岐にわたるという。

半年間のプログラムで12回の講義を担当するのは、岡田恵子・内閣府男女共同参画局長や、「働き方の男女不平等」の著書があるシカゴ大の山口一男教授ら、各分野のトップランナーの講師たちだ。基本はオンラインで、座学に加えゼミ形式で議論する。今期はリアルに顔を合わせる合宿も予定する。

桜井さんは「いつか救世主が現れるなんてない。ジェンダー平等の実現には、みんなが自分の範囲内でコツコツとアクションを重ねていくしかないんです」。

（『朝日新聞　2023年9月27日』夕刊より）

（岡林佐和）

問　現在世界中で、社会的・文化的につくられた性別（ジェンダー）を問い直し、性別に関わりなく、その個性と能力を十分に発揮することができる社会を創るための取組みが行われています。しかし日本では、男女の賃金格差、セクハラやモラハラ、男性優遇の法令、政治や経済における重要な意思決定の際の低い女性の参加率など、様々な問題が山積しています。あなたは普段の学習や生活の中で、どのようなジェンダーの問題（もやもや）を感じますか。またそれを解消するためにはどうしたらよいと思いますか。身近な例や、自分にできることなどにも触れながら、具体的に記してください。（六〇〇～八〇〇字・六〇分　題名などは書かずに一行目から本文を書くこと）